

<http://kyoto-nonohana.jp/>

四季の草木染

野の花工房

知恵の経営報告書 2011 年度版（公開用）

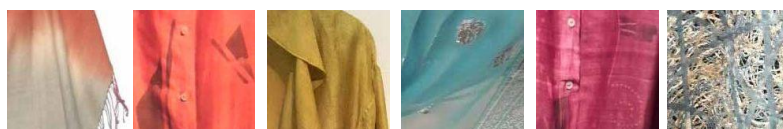


*公開用バージョンのため、内容の一部を非公開としていますことをご了承ください。



もくじ

	(ページ)
I 挨拶	2
II 野の花工房について	3
III 野の花工房の想い（ミッション）	7
IV 草木染の作品	9
V 毎年待っている人がいる展示会	15
VI 草木染教室	18
VII 野の花工房にしか出来ないこと	21
VIII 野の花工房の魅力と知恵	27
IX 知恵のふくろう成長の物語	30
X あとがき	31





I. ご挨拶

草木染は、自然からの贈り物です

気持ちを優しく、穏やかにする草木の美しい色を広めていきます



主宰者 松本つぎ代

2008年、京都と奈良の間にあって、未だ自然が多く残っている井手町に「四季の草木染 野の花工房」を開設した、代表の松本つぎ代です。

名称の野の花工房の前に、四季の草木染とつけたのは、日本の四季折々の風景の美しさを草木染にも生かしたいと願ったからです。

野の花工房は、「草木染を通じて、お客様に身近な植物から美しい色を頂く感動を伝え、その感動を広めていく」を経営理念にしています。

その理念を具体化するために、布選びからこだわったオリジナルな草木染服の製作販売と、草木染の感動を直接味わっていただき、学ぶ喜びを共有する教室の運営の二つから成っています。

今回、「知恵の経営報告書」の作成に取り組んだのは、工房に存在する有形無形の「知恵」を明確にし、よりシステム化された工房として、前進したいと考えたからです。何が強みで、何が足りないかを認識することにより、今後進むべき方向が見つけられると思います。又、次世代に事業を継承するために、何が「知恵」なのかを明確にしておかねばと思ったからです。

事業として展開し始めたのはほんの2年前ですが、それまで25年近くの作家活動の経験を活かし、より社会に求められる事業として展開して行こうと考えています。

野の花工房に集うすべての人が、草木染を通じて充足した豊かな暮らしを送ることが出来るようになれば、大きな喜びとなります。





Ⅱ. 野の花工房について

1. 工房について

【 名 称 】	四季の草木染 野の花工房
【 創 業 】	1985年4月
【 工 房 設 立 】	2008年4月
【 代 表 者 名 】	松本つぎ代
主宰者松本つぎ代 【プロフィール】	1949年 和歌山県生まれ 1970年頃大学を1年間休学し、まだ海外渡航が珍しかった時代にイギリスにホームステイする。この間フランス、スペインなどに旅行。帰路はマルコポーロの東方見聞録バスというバスに乗って、ドイツ、トルコ、アフガニスタン、インドなどを通して帰ってくる。(無鉄砲！) 1973年 大阪市立大学第二文学部卒業 1985年 染色家の夫を手伝うかたわら、志村ふくみ氏に感銘を受け、現代の服に生かそうと草木染を始めました。 『四季の草木染 野の花工房』を設立したのもこの年です。
【 事 業 内 容 】	草木染製品の製作販売並びに草木染教室の開催
【 本 社 所 在 地 】	京都府綴喜郡井手町井手宮ノ本73-5
【 W e b サ イ ト 】	http://kyoto-nonohana.jp/
【マスコミ掲載】	【テレビ】 2009年NHK京都【京のええとこ連れてって】出演 【ラジオ】 2009年KBS京都ラジオ【笑福亭晃瓶のほっかほかラジオ】 春と秋の2度にわたり出演 【新聞】 2010年4月朝日新聞 【野の花工房 教室展】 2009年3月京都新聞 【野の花工房移転オープン】 9月毎日新聞 【野と遊ぶ衣展 神戸の展示会】 【雑誌】 1990年11月号雑誌ハイミセス【草木染の毛糸で作るニット】 【エッセイを連載】 1992年～京都新聞山城版へ約3年半「山城春秋」全15回





2. 松本つぎ代と「野の花工房」のあゆみ

【草木染への思いを暖めていた期間】（1974年～85年）

夫がろうけつ染で、着物を染めるという仕事を自宅でしていました。そのため、絹の白生地に蠟で一筆一筆線描きをしたり、模様の色をさしたりと言う作業を手伝っていました。染料は化学染料でした。

草木染がまだ珍しかった頃、志村ふくみ氏(紬織の人間国宝)の展覧会に出会い、化学染料にはない、草木染の色の微妙な深い美しさに、大変な驚きと感銘を受けました。

身の回りの草木からこんなにも美しい色を取り出せるのかと、それまでの染めのイメージが大きく変わりました。その草木の色の美しさを自分でも追い求めてみたいと思いましたが、教えてもらう人もいませんでした。氏の講演を聴きにいったり、展覧会に足を運んだりしながら、草木染への思いを持ち続けたまま 10 年が過ぎました。友人と、よもぎを染めたのをきっかけに、少しずつ独学を始めました。

【創業期】（1985年～1988年）松本つぎ代 個人作家としてデビュー

失敗を重ねながらも、草木染を現代の服に生かそうと、宇治市の自宅を工房として、身近な植物で毛糸を染め、セーターなどを作っていました。志村氏のような紬の着物に行かず洋服や小物づくりを選んだのは、その方が自分でも日常的に楽しみ、また他の多く

年代	野の花工房のあゆみ
1985 年	自宅に四季の草木染 野の花工房開設
1988 年	自然からの贈り物展（初個展） 宇治大久保ギャラリー、来場者約 200 人、マスコミ報道（NHK、テレビ朝日）
1989 年～	以降毎年展示会を各地で開催

の人に着てもらったり、身の回りにおいて楽しんでいただく機会が多く、草木染のよさをより多く伝えられると思ったからです。

草木で染めた毛糸を見ていただくと、色んな方から分けて欲しいと言われ、これを仕事にして行こうと決心しました。3年後に初めての個展を開き、新聞、テレビ、ラジオとマスコミにも取り上げられ、ギャラリーの前に朝早くから行列が出来るほどに大好評でした。

それから以降、ずっと毎年数ヶ所各地で個展を開いて、作品を見ていただき、草木染の魅力や、染めの技法などのお話しをしながらお客様に買っていただくというやり方で来ました。



- 5 -



【第2転換期】（2008年～2010年）

作家としての活動だけではなく、草木染の魅力を広げるため、工房を生活の場から独立させることを決意しました。井手町商工会で開催された、「マーケティング講座」へ参加し、マーケティングの重要性を知ったのも、この頃です。工房にふさわしい空き家に出会い、商工会に相談し、日本政策金融公庫の創業融資を受けました。

年代	野の花工房のあゆみ
2008 年	古民家に四季の草木染 野の花工房開設 ニュースレター第1号を発行
2009 年	息子が野の花工房に参加、作家から事業としての展開を考える 小阪裕司先生のワクワク系マーケティング実践会に参加
2010 年	新工房にて教室展開催 来場者数約 500 名/7 日間

活動の場を自宅から工房へ転換し、展示会以外でも草木染の作品に触れてもらえるギャラリー兼ショップを開設しました。

野の花工房以外の陶芸家の作品なども並べて、日々の暮らしを豊かに楽しくする提案をしています。



色とりどりの作品がならぶショップ



かわいらしいギャラリーの作品の数々



野の花工房がテレビに出た日



五川を散歩するキャスターと私たち



【京のええとこ連れてって】2009年11月
NHK京都取材の様子





Ⅲ. 野の花工房の想い

ミッション

身近な自然から色を頂き、その感動を広める

ビジョン

草木染の魅力を、製作過程を共有（共感）しながら伝える

「野の花工房の草木染」の魅力とは何なのでしょう

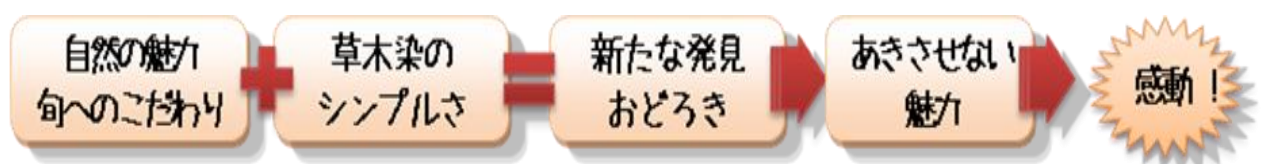
草木染は、きめの細かい作業の積み重ねで出来上がっています。

季節を追いかけて、野山で美しい旬の色が出る植物を探す楽しみ、どんな色を秘めているのだろうかとワクワクして待つ時間、媒染剤を変えて色の変化を楽しみ、様々な技法を布に施し模様を作り出す喜び……いくつもの要素が組み合わされて時間を経て作品が生み出されて行きます。

「草木から色を引き出し染める」というシンプルな行為の中に、自然への細やかな関わり、人との気持ちの交流、自分の手で新しい価値を作り出したと言う達成感などが詰まっているのです。「草木染をする」は、単に物を買って所有する、あるいは単に行動すると言うだけのものではありません。自分の手を使ってひとつずつ重ねる行為で、その人自身の「心の豊かさ」を引き寄せて行く行為なのです。

「自然を見る目が変わりました」と多くの生徒さんが話されます。道端の今まで名も知らなかった雑草が、見過ごしていた野山の木々が、草木染をはじめたことで自分に価値のあるもの、豊かさをもたらしてくれるものに代わるのです。そこに自分だけの草木染ワールドをイメージし、展開していくことが出来るのです。展示会で、野の花工房の服の製作過程をお話することで、そこに自分だけの草木染ワールドをイメージし、展開していくことが出来るのです。だからこそ、多くの人を惹き付け、支持されるのだと思います。

これからの時代は、そのような「心の豊かさを実感できる」消費がもとめられているのではないのでしょうか。草木染の展開は、時代の要請に応えられる事業だと思います。





野の花工房のイメージキャラクターについて

野の花工房には、「コウフクロウのコウちゃん」と名づけたマスコットがいます。このマスコットは、知恵をつかさどるとされるふくろうをもとに、松本章三（夫）がデザインしました。野の花工房に集うみんなが知恵を出し合い、幸福になるようにと願い、生徒さんおよびお客様に命名を募集し、2010年1月に決まったものです。野の花工房の色々な通知や、お便りに登場して、野の花工房の事を伝えています。



コウフクロウのコウちゃん

この「知恵の経営」報告書でも、登場いたします。



四季の移ろいを感じながら、草木染教室の合間に談笑する生徒さんたち





IV. 草木染めの作品

野の花工房の服やストールを身に着けていると、街で『どこでその服を買われたのですか』と、よく声をかけられるとお客様から聞いています。そして、人の視線を感じるとも言われています。

それだけ野の花工房の服は、色、型、見た感じが、既製服とは違った印象を与えるのだと思います。きめ細やかに自然と向き合い、植物の生命の色を頂き染めた服は、人々に「自然への懐かしさ」と「心の豊かさ」を思い起こさせ、何処にも無いものだから発見されるのだと思います。

では、そのような作品はどのような想いと作り方をしているかを説明して行きます。

1. 作品説明



茜染めシルクコットンブラウス～還暦を迎えるあなた様へ

「還暦に赤を着る」にぴったりの茜染めブラウス。今まで赤は着た事が無いと言う方にも、還暦を迎える自分へのプレゼントとして人気シリーズのブラウスです。媒染剤は、みょうばんです。型紙を模様どおりに彫って布に貼り付け、鉄媒染に変える事で黒い模様を作り出しています。



草木染の後、刺繍と布で模様を描いたワンピース

月桂樹、どんぐり、藍などの草木で、ぼかし染めした服に型紙を置き、模様を描きました。その模様は、さらに奥行きを持たせるために、絹のリボンテープ、オーガンジーの布で刺繍とアップリケをしています。



編み物とも織物とも違う、一本の糸から布に、さらに服に作り上げる、野の花工房の魔法の服

多種類の絹糸を草木染（桜、茜、メリケンカルカヤ、月桂樹、よもぎ）します。服のパーツ毎のパターンに沿って染めた糸をフリーに並べ、ミシンで縦横 1.5cm 幅に縫っていく。数本の絹糸が布そして服に出来上がる。





2. 染料となる植物と色

色は草木の採る時期、場所、煮出す時間、シルクや綿などの素材の違い、媒染剤によって本当に様々に変わり、一期一会の楽しみがあります。以下の染料となる植物と色はほんの一例です。（素材:綿、媒染剤:みょうばん）

カラスノエンドウ



色：緑がかった黄色
部位：茎、葉、花で
時期：4月ごろ フレッシュな状態で

茜（あかね）



色：淡い紅色～濃い朱赤
部位：根を使う
時期：採集が困難なためインド茜で

野いばら



色：淡いクリーム色
部位：茎、葉、花
時期：6月ごろ フレッシュな状態で

どんぐり



色：黄土色～こげ茶
部位：実、帽子部分
時期：秋に集めて乾燥保存も可

桜



色：淡い桜色
部位：樹皮、つぼみのついた枝
時期：2～3月樹皮を削り枝を細かく刻む

メリケンカルカヤ



色：濃い黄金色
部位：全草刈り取って
時期：10～12月、刈り取って乾燥保存も可





丹後ちりめん（正絹）の草木染帯揚げ

この丹後ちりめんの帯揚げは、アンティーク着物専門のお店から、100枚（10色10枚ずつ）を頼まれて染めたものです。

上段（左より）

淡い茜、桜、蘇芳(すおう)、濃い茜、黄花コスモス



下段(左より)

メリケンカルカヤ、カラスノエンドウ、どんぐり、ログウッド、月桂樹+どんぐり





3. 製品（作品）へのこだわり

草木染には、色があせやすい、取り扱いが難しいなどの想いをもたれている方が少なくありません。

草木の種類によったり、染めかたが不十分な場合など、そのようなことが起こります。野の花工房では永年の経験を活かし、色があせにくい植物を選び、丁寧な染め方を行っています。

野の花工房では、各商品に品質表示と染めた植物の名前のタグをお付けしています。また、お買い上げ後の商品について、次のような取り扱い注意およびアフターケアを明示し、お客様に、安心感を持っていただくようにしています。

化学染料より色が移ろいやすいということを、草木染の1つの特性として理解していただき、ゆっくり変化していく色を楽しんで頂きます。色の多くが飛んでしまったときは、もう一度別の植物で染め替えるなどによって生まれ変わり、何度でも楽しんでいただけると考えています。とは言っても、数回着ただけで色落ちするようなものは、製品として作ってはいけないことだと思っています。今までに、そのようなクレームはありません。



「品質表示タグ」

野の花工房の草木染作品をお求めいただき、ありがとうございます。

～草木染作品のお取り扱いについて～

草木染の作品は一般の服に比べ日光や摩擦に弱く、お取り扱いには注意が必要です。

- ・直射日光をさけて保管して下さい。
- ・洗濯は家庭でする場合、おしゃれ着洗いの中性洗剤を使い、手洗いしてください。脱水機や乾燥機は、色落ちしやすいため使用せず、干す際は陰干ししてください。
- ・クリーニングに出す場合は、草木染であることを告げ、お店にご相談ください。
- ・永くご愛用されて、色あせしてきたなどの場合は染替えもしております。ご相談ください（有料）

草木染の服をお求めいただいたお客様へ

- ・着丈など簡単なお直しは、お買い上げ後、1ヶ月間無料で承っております。お気軽にご依頼ください。

「取り扱い説明書」





4. 作品作りの工程(仕立てあがった服に後染めする場合)

イメージづくり



どんな服を作ろうかなとイメージ・・・

植物や色を思い浮かべる

①布選び

草木染で染めるのは、木綿、麻、絹、ウールなどの天然繊維です。
野の花工房では、その服に合った服地を探すところからはじまります。
着て頂く時期や、風合い、用途などを吟味し、繊維を選びます



数多くある布の種類

②服のデザイン&パターン作成

繊維の持つよさを引き出すデザインを、本を参考にしたり、縫製工場のアイデアを参考にイメージを膨らませ、考えます。
パターン作成は、パタンナーに任せています。

③縫製

縫製は、繊維によってその繊維の得意な専門工場に出したり、一点ずつ洋裁店で縫ってもらったりします。

④植物材料集め

野の花工房は、新鮮な匂いの色にこだわっています。そのため、染料屋で染料を買うのではなく自ら野山に匂いの色が出る植物を探しに行きます

近くの野山、庭、梅林、茶畑、竹林などから、
その時期に一番美しい匂いの色が出る植物を集めます



植物材料の例

⑤草木染め

その服にあった色合いを思い描き、草木染をします。様々な染色技法で染めていきます。数種類の植物をつかって、何度も色を染め重ねたり、媒染剤を変え、色を複雑に組み合わせたりもします。



材料集めのひとこま





草木染の手順

①材料を細かく切る、削るなど

集めた草木を、色を取り出しやすいように、植物により細かく切ったり、削ったり、砕いたり、します。

②煮出す

細かくした材料を布袋にいれ、よく色が出てくるまで煮出し、染液を作ります。材料により煮出す時間は違います。

③絞り、板締めなどで布に模様をつける

模様を付ける作業をします。1色で染める時、ぼかし染めの時は、この工程はいりません。

④媒染液に浸ける

植物を煮出している時間に、③を媒染液に浸けます。媒染剤とは、植物から色を引き出し、布に定着させるためのものです。工房では、明礬、木酢酸鉄、酢酸銅などの身体に安全な媒染剤を使っています。媒染剤の違いにより、同じ植物でも染まる色を変えることが出来るのが、草木染の面白さです。

⑤染める

いよいよ染液に布を浸け、温度を上げながら染めて行きます。染液に浸けたとたん、パァ〜と色が発色してきますので、一番楽しい時です。

媒染剤を変える事で、様々な色を引き出すことが出来るので、1つの植物から2〜3色のぼかし染めなども楽しめます。

⑥水洗い&乾燥

絞りをしたものは糸をほどき、板締めをしたものは、板をはずして布を広げ、水洗いを丁寧に行います。日光に長時間干さないようにして乾かします。



⑥加工

模様の上から、さらに刺繍を施したり、金彩を施すなどの加工を加えます





V. 毎年待っていてくれる人がいる展示会

1. 展示会開催

展示会は、1988年以来、毎年3～4ヶ所で開いてきました。百貨店やギャラリーでは請われて企画の展示会として、又貸し画廊などで会場を借りて開いています。

服、ストール、バッグなど服飾関係を主に展示し、企画の場合は百貨店の担当者、ギャラリーの場合はオーナーなどの協力で展示即売という形をとっていました。又貸し画廊の場合は、生徒さんの協力などで草木染の良さを知ってもらいながら販売を行って来ました。

展示会開催前には、案内状（DM）を1000～1500枚作成し、お客様に周知していただき、見に行ってみようという動機付けをするために、NL（ニュースレター「野の花工房便り」）に同封したり、前もって会場にいたりしています。又、マスコミに取り上げられたり、新聞などに展示会の案内が掲載されることもあります。



2. 展示会の特徴

（1）商品の多様さ

草木染の良さを多くの方に知っていただくために、服を中心にインテリア、バッグ、小物など幅広く商品を作っています。ハンカチのような千円前後から洋服の数万円のものまで価格展開しています。



（2）クオリティの高いオリジナル商品

草木染は量産が難しいため、1点1点手作りで商品を作っています。

染めの土台となる布地からこだわりを持って選び、デザインを起こし、さまざまな草木の色を数種類使い、またろうけつ染め、型染めなどの草木染とは違った技法も組み合わせるクオリティの高いオリジナル商品を作っています。草木からいただいた美しい色を引き立たせるデザインであり、風合いであることを心がけています。



3. 展示会での接客

販売は、ギャラリー等で行う為、展示会に来ていただいたお客様には、ソファに座っていただき、一人ひとり時間をかけてお話しすることが出来ます。染めた植物の説明や野の花工房の想い、草木染ワールド（どこで集めた草木なのか、どのような想いで染めたか、身体に良い草木しか使わないなど）の楽しいお話をさせていただきます。又、染め方、技法の説明





板、どの植物でこんな色が染まりますなどの表示を丁寧に行い、草木染の世界に入りやすいように、工夫をしています。新規のお客様はもちろんのこと、既存のお客様ともゆっくりお話しすることで、信頼関係が築けています。

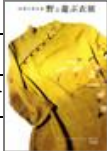


4. これまで開催した展示会

開催年	これまで開催した展示会名／場所	会場（トピックス・マスコミ）
1988 年	自然からの贈り物展/京都・宇治市	大久保ギャラリー（初めての展示会）
1989 年	自然からの贈り物展/大阪・梅田	ギャラリーま・たと
1990 年	自然からの贈り物展/東京・銀座	松屋銀座 ギャラリー和の座（東京での初展示会）
	染色二人展/大阪・八尾	八尾銀花（夫と二人で展示会）
1991 年	自然からの贈り物展/京都・宇治市	大久保ギャラリー
1992 年	自然からの贈り物展/京都・三条	キャピタル画廊（京都市内で初展示会）
1994 年	自然からの贈り物展/京都・北山	アブリル
1996 年	自然からの贈り物展/京都・北山	アブリル
	自然からの贈り物展/京都・宇治市	大久保ギャラリー
	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊（大阪初 毛糸の他、布物も発表）
	自然からの贈り物展/三重・津市	アートギャラリー満寿巳
1997 年	自然からの贈り物展/名古屋市	ギャラリー沙羅
	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊
	自然からの贈り物展/奈良市	壺やギャラリー
	自然からの贈り物展/三重・津市	アートギャラリー満寿巳
1998 年	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊
	自然からの贈り物展/愛媛・松山	ギャラリータナカ
1999 年	自然からの贈り物展/兵庫・川西市	川西阪急百貨店（百貨店で初展示会 大盛況）
	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊
	自然からの贈り物展/奈良市	壺やギャラリー
2000 年	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊
2001 年	自然からの贈り物展/兵庫・川西市	川西阪急百貨店
	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊
	自然からの贈り物展/京都・四条	嶋屋画廊（これ以降、京都の展示会では生徒さんが喜んで手伝ってくれます）
2002 年	自然からの贈り物展/兵庫・川西市	川西阪急百貨店
	自然からの贈り物展/大阪・心斎橋	泉画廊
	自然からの贈り物展/奈良・帝塚山	ギャラリー アン・ドウ
	染と布とジュエリー展/東京・池袋	東武百貨店（ジュエリー女性作家等と合同展）
2003 年	野と遊ぶ衣展/兵庫・加古川市	加古川ヤマタシ ローズギャラリー
	野と遊ぶ衣展/大阪・心斎橋	泉画廊
	野と遊ぶ衣展/京都・四条	嶋屋画廊
	野と遊ぶ衣展/東京・池袋	東武百貨店（大美術画廊で展示会 売上最高）





2004 年	野と遊ぶ衣展/東京・京橋		千疋屋ギャラリー
	野と遊ぶ衣展/大阪・心斎橋		泉画廊 (泉画廊閉店、大阪のファンに以降つなげられず残念)
	野と遊ぶ衣展/東京・池袋		東武百貨店
2006 年	野と遊ぶ衣展/京都・四条		嶋屋画廊
2007 年	ふだん着の藍染展/福井市		ギャラリー風遊舎
	野と遊ぶ衣展/京都・四条		嶋屋画廊
2008 年	野と遊ぶ衣展/京都・四条		嶋屋画廊
	野と遊ぶ衣展/神戸・元町		トアギャラリー (神戸で初めての展示会)
2009 年	野と遊ぶ衣展/京都・四条		嶋屋画廊
	野と遊ぶ衣展/神戸・元町		トアギャラリー
	野の花工房移転オープン展/京都・井手町		野の花工房 工房で
2010 年	「自然からの贈り物」展/京都・四条		嶋屋画廊 (ワクワク系のディスプレイを心がける 集客に効果あり)
	「自然からの贈り物」展/神戸・元町		トアギャラリー

5. 展示会の雰囲気・様子

「その服似合ってるよ」「こっちの服の方が、いいと思うわ」「この色きれいね～」
会場で初めて出会ったお客様同士が、お互いに試着した服をそれぞれ感想を述べ合って、自分が気に入った服を選んでいきます。

野の花工房の展示会は、草木染ワールドに共感した人たちが集まってきているということもあって、とても和やかに見知らない人同士でも気軽に声をかけあっています。生徒さんが展示会を手伝ってくれるので、お客様に草木染教室での楽しいエピソードをお話ししたり、自分の体験談をお話したりで、とても賑やかです。

ある神戸のお客様は、神戸での展示会に2度来られ、京都の展示会には又2度来られて、一日中画廊にいらっしゃって工房のスタッフのように、お客様にアドバイスしたり、お声がけをしてくれたりしています。おまけにご自分も来るたびに何かを選んでお買い上げして下さいました。

「色がきれいで心がなごむね～」「ここにいると帰りたくなくなるわ～」と仰ってくれます。

京都の画廊は、大通りに面していて、展示しているものが通りから見られるので、通りがかりの方も入って来られます。東京からの女性二人連れの初めてのお客様は、

「並んでいる服の色が余りにきれいで、す～と引き寄せられました」

「草木染って、もっと渋くて暗い色だと想像していたけれど、とてもきれいな色が出ているので、びっくりしました」

「化学染料のようにガラガラしていなくて、草木の優しさが伝わってくるようです」

「こんな服、今まで見たこと無いから、着たら楽しそうだわ」

と嬉しい言葉を残してくれました。周りから似合っているよと勧められ、ご自分でも気に入られた服をお二人とも選んで、「京都の思い出を形に残して、自分へのご褒美にします」と仰って帰られました。

物があふれている世の中で、人の気持ちを動かし、発見してもらえる野の花工房の服は、心の豊かさを感じ深める一助になっているのだなと再認識しました。





Ⅵ草木染教室

1. 教室

現在約40名の生徒数となっています。毎月8回(日)の草木染教室と、1回(日)のろうけつ染教室を開設しています。また、新しい方を教室にお誘いするために、半日体験教室を毎月2回(日)開いています。体験教室で草木染を体験してから毎月の一泊教室に参加する人が多いです。

工房の同じ設備を使い、各生徒の作りたいものに合わせたマンツーマンの教え方をしています。近畿圏はもちろん、千葉県などからの参加者もいらっしゃいました。

ある日の教室の様子

10:00	「おはようございます」 エプロンを着て準備をします	この日はヨモギとパープルセイジ 
10:10	季節の旬の草木で染めます。 まずみんなで細かく刻んでから、火にかけます	 
11:00	工房2Fショールームで各自が染めたい服、布などを選び 「絞り」や「板締め」などの作業をします 同時進行で布を染まりやすいように下地処理をします	 
12:00	昼食&おしゃべりタイム いろいろな話題で盛り上がります	
13:00	いよいよ染めていきます	
14:30	媒染剤を変えて、色の変化を楽しみます	 
15:00	染めあがり、干して乾かします。各作品の写真撮影、品評会などもします	
15:30	お茶を飲みながら、次回染める草木の予定などを決め、終了 お疲れさまでした。家でアイロンがけ、縫製などします。自分用、プレゼント、教室展用などに。	





2. 教室展

生徒の意欲を引き出し、飽きさせないために2年に一度教室展を開いて、すでに8回を重ねています。

今後、生徒数の増加が見込まれるので、2011年より井手町の「さくらまつり」にあわせて毎年開催を決めています。

教室展の開催により、野の花工房がより広く知られるようになりました。



(教室展の開催を知らせる案内状)

3. 教室展の成果と生徒さんの声

「全く知らない人に自分の作品が売れて、こんな経験初めてで、ちょっと興奮しています」

「自分の作ったものが、人様に喜んでもらえるのですね」

「他の人の作品を見ることで、とても勉強になります」

「別のクラスの人と仲良くなれて、話しが弾みました」

「色々教え合って、バッグなど、作れるものが増えて嬉しいです」

「教室展があるから、作品に仕立てたり、次何をつくろうかなとアイデアが浮かんできます」などの声を、多くの人から聞いています。

日頃顔を合わせない別クラスの生徒さん達が、自分が染めて作ったものに自信を持ち、お互いに染め方、作り方などを教えあって、互いに交流を深めています。生徒さん達のにこやかな、てきぱきとした接客ぶり、暖かな交流風景を見てみると、草木染ワールドを自分のものとし、楽しんでいるなと感じます。

教室展は、生徒さんに教室に通ってきて良かったと喜んでもらう活動であり、これからの教室にこれからもずっと長く参加しようと思ってもらうイベントなのです。そして野の花工房にとっても新しい生徒さんを増やす、大きなイベントとなっています。





教室展の年表

	開催年	展覧会名	開催地	会場
1	1995 年	四季のまんだら展/教室展	京都・祇園	京都クラフトセンター
2	1998 年	四季のまんだら展/教室展	京都・四条	嶋屋画廊
3	2000 年	四季のまんだら展/教室展	京都・四条	嶋屋画廊
4	2002 年	野の花工房教室展	京都・四条	嶋屋画廊
5	2004 年	野の花工房教室展	奈良市	ギャラリー飛鳥園
6	2006 年	野の花工房教室展	京都・井手町	旧・野の花工房
7	2008 年	野の花工房教室展	京都・井手町	寺島邸
8	2010 年	野の花工房教室展	京都・井手町	野の花工房



笑顔が溢れる教室展の風景



自慢の作品をお披露目する生徒さんと多くの来場者





VII. 野の花工房にしか出来ないこと

1. 地域資源とよき関係

野の花工房では、地域資源を有効活用させていただいています。又よき理解者に恵まれて、色々な協力をしていただいています。

(1) 桜の事例

例えば、桜で染める桜色は、2月～3月のつぼみのついた頃の桜の枝からしか得られません。花が咲いてしまうと、花に色がとられてしまい、もう枝には残っていないので染めても桜色は染まりません。



ところが「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」と言う諺があるように、桜を切る人は、余りいません。ましてやこれから咲こうとしているつぼみのついた枝を切る人はいません。では、どうしたらそのような貴重な枝を手に入れることが出来るのでしょうか。

2010年、桜の枝は、久御山町の河川改修工事で切られることになった桜の枝を、2月に頂きました。又3月には、井手町の玉川沿いの桜が剪定された時に頂きました。両方とも井手町の土木建設会社とのご縁で、声をかけていただいたものです。本来ごみとして処分されてしまうものが、草木染の材料として少しでもお役に立てて良かったと、会社の方からも言っていただきました。その桜で染めたスカーフ等は写真に撮られて、桜がこのように役立てられたと報告書にも記載されたようです。

(2) 藍の生葉の事例

藍を隣の木津川市山城町で育ててもらっています。藍の種は毎年、前年の種を蒔かないと、芽が出ません。そのため毎年欠かさず植え続けなくてはなりません。幸い生徒さんが畑を持っているので、そこで育ててもらっています。毎年、種をそれぞれのクラスの畑がある人に少しずつ分けて渡し、藍を育てるネットワークが出来上がっています。藍の生葉染めは、通常の草木染と違い、フレッシュな葉だけを青汁ジュースにして染めるので、初めての方は、とても驚かれ感激をされます。





2. 25年のこだわりの成果

野の花工房で染めた植物の数は、1年間で30種類にもなります(2010年実績)。数の多さとともに、特殊な染め方をする植物にも取り組んできました。

(1) 染料となる植物の数の多さ：2010年の1年間で染めた30種類の植物たち

◆四季の草木たち(27種類)

春(6種類)：桜、ミモザ、からすのえんどう、

ヒメジョオン、きぶし、高野まき

夏(6種類)：よもぎ、どくだみ、藤、藍、

赤紫蘇、茶葉

秋(10種類)：やまもも、栗、どんぐり、

マルバアカソ、ムラサキシキブ、メリケンカルカヤ、黄花コスモス、

セイタカアワダチソウ、リょうぶ、ヤブマオ

冬(5種類)：梅、びわ、つが、イチヨウ、月桂樹



◆染料店から購入するオールシーズンの草木たち(3種類)

すおう～乾燥した樹皮、材のチップを購入(日本では自生していない)

茜～乾燥した根チップを購入(日本茜は、ほとんど自生していず、掘り起こ

すのに時間と手間がかかりすぎるので、インド茜を購入)

ログウッド～乾燥した樹皮、材を購入(日本で自生していない)

(2) 染色の技法

野の花工房では、それぞれの製品にあう技法を取り入れて染めています。様々な技法を高度に組み合わせることで野の花工房独自の世界が広がっています。

- ・ 浸し染め…植物染液に布をいれて染めます。ぼかし染めなども出来ます
- ・ 絞り染め…糸と針を使って、縫い付けて絞り染めます
- ・ 型絞り染め…色々な木型を作り、布をはさみ模様を作ります
- ・ 手描き染め…直接布に手で描きます





（３）染めるための素材【動物性繊維と植物性繊維】

草木で染められるのは、綿、麻、シルク、ウールなどの天然繊維およびレーヨン（セルロースから作られる植物系再生繊維）です。野の花工房では、そのすべての繊維素材を染めて服作りをしています。シルクやウールなどの動物性繊維は、すぐに染められますが、綿、麻などの植物性繊維は、草木ではよく染まらないので、染まるように下地処理が必要となります。手間がより一層かかる植物性繊維にも取り組んでいるのは、お客様が身にまとう時の着心地の良さや、四季を通じて草木染の服を着ていただくためです。

また、座布団やのれん、ランチヨンマット、コースターなど身の回りの生活品に、綿、麻の素材はなくてはならないものです。



麻を染めた座布団

３、20年続いている草木染教室

単に草木からの色を染めるだけではなく、生徒さん一人ひとりが望む技法や染め重ねなどを提案し、オリジナルなものが作れます。又生徒さんを飽きさせない知恵も20年に渡り多くを蓄積しています。

（１）他の教室にはないクオリティ

野の花工房の教室は、「自然から心の豊かさを手に入れられる教室」です。

① 質の高い作品が作れる教室

- ・教室への入会は、まず半日体験教室を経てから、入ってもらいます。
- ・各教室は、一人ひとりに目が行き届く少人数制です。
- ・T シャツやストール等の染めるための材料を数多くそろえたショールームで、その日に染めるものを選んでもらいます。



工房で使っている道具や設備が教室でも自由に使えます。



- ・ 特殊な技法も順を追って教えています。
- ・ 各自が思い思いの作品づくりが出来るので、達成感も得られます。

②仲間作りが出来る教室

教室では各グループに分かれています。染料となる植物も協力し合って集めたり、作業を進めるのも助け合うので連帯感が生まれます。それぞれのグループで親密度が増し、昼食時間などはおしゃべりが楽しい情報交換の場となっています。

③自然から豊かさを手に入れられる教室

毎月、季節ごとの旬の植物を染めるので、生徒さん自らが植物を集めることで草木染への深い理解が得られ、楽しさを一層感じられます。野山を歩くことが好きな人は、ご主人と一緒に山に入り採集してきて、初めての植物にも挑戦しています。「どんぐりをご近所の方を巻き込んで集めています。そのどんぐりで染めたハンカチを見せると、きれいね！と感激していました」と、ご近所とのコミュニケーションの広がりを楽しんでおられる生徒さんもいます。

また別の生徒さんは、剪定した自宅の庭木を持ってこられ「今までごみと思っていたものが、こんなにきれいな色に変わるのですね！」と新しい発見を喜んでいます。

④生きがいを見つけられる教室

各自思い思いの作品づくりが出来るので、自分の新たな一面に出会うことが出来ます。また、他の人の作品を見ることで互いに刺激し合い、レベルの向上や制作意欲の向上にもつながります。井手町の自然豊かな環境を楽しみながら、遠方から通われている生徒さんも多くいます。



生徒さんが主役の教室展は、各自が自分の作品の価値を感じる事が出来る晴れの舞



台となっています。

「ここに来ると若返るわ!」「月に一度の教室が何より楽しみ!」「自分に合った生き方が見つかりそう」「この歳で解り合える友達が出来てよかった」など、心の豊かさを感じて頂いています。

仲間と草木染を通して感動を分かち合い、豊かな気持ちになることが、教室を永く続けていく理由となっています。

(2) 生徒さんから学ぶこと

毎月の教室で生徒さんから教えられることも多いです。

20年間途切れずに教えてきましたが、教室を始めた頃は技法も余り知らず、染めやすいシルクとウールだけを染めていました。生徒さんの要望で、綿や麻などの手間のかかる素材も研究を重ね染められるようになりました。生徒さんの何気ない思いつきで持ってきた珍しい植物で染めてみると思いがけず良い色が出て、これから使っていこうという経験もありました。それにより染める植物の数も段々増えていきました。

生徒さんの中には毎月教室で染めた後に、自分の作品の写真を葉書にして感想を添えて送ってくれます。そのお葉書をいただく事で、こんな風に染めた布を家で使っているのだなと大いに参考になりました。



また別の生徒さんは、毎回染めた植物を記録したファイルをつくっています。毎回ハンカチを染めて色見本として残り、その日の天気や技法、染めて感じたことなどを記録されています。一日の染め教室の記録





が単に記録だけにとどまらず、ファイルしていくことで、豊かな時間がもう一度呼び起こされ、草木染への想いが積み重なっていくと思います。このファイルづくりは、他の生徒さん達にも薦めてみようと考えています。

草木染を通じて、ともに集い、互いに学びあい、みんなで喜び合う関係が出来ていることが大変嬉しく、これからもっともっと、このようなすばらしい関係を多く増やしていけたらと考えています。

(3) 2Fにショウルーム

2010年8月から、工房の2Fに染めるための素材のショウルームをつくりました。

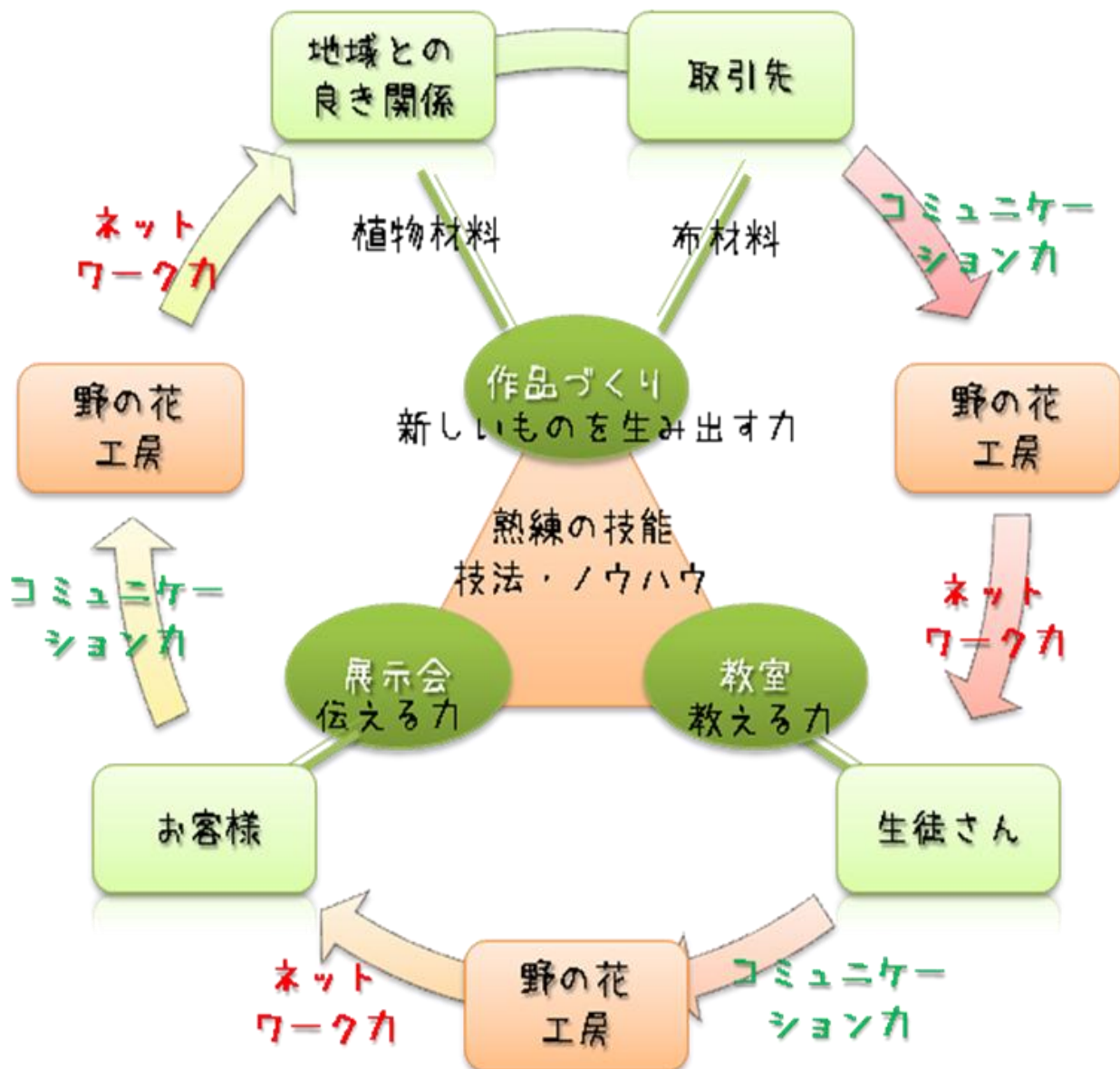




VIII. 野の花工房の魅力と知恵

野の花工房のミッション

「身近な自然から色を頂き、その感動を広める」





1. 蓄積された他にはない工房の知恵

(1) 「新しいものを生み出す力（植物採集、技術）」

野の花工房には、新しいものを生み出す力が具わっています。季節の旬にこだわった植物採集、またその植物の種類の多さ、独自の染め方、その色の良さを活かす商品デザイン、雑貨から服までバラエティに富んだ品揃え、一点物にふさわしいギャラリーでの展示会という販売形式、その一つ一つのこだわりが野の花工房の新しさと共にオリジナリティを生み出しています。

(2) 「教える力（教室）」

教室に集う人たちは、野の花工房のミッション「身近な自然から色を頂き、その感動を広める」に共感し、自分でもそのような世界に踏み込んでみたいと願っている人たちです。生徒さんを飽きさせない教える力と、師弟の深い絆を築くシステムを 20 年にわたって蓄積してきましたが、さらにワクワクさせる事を考えて、野の花工房と生徒さんとの輪を広げていきます。

(3) 「草木染の魅力を伝える力（展示会）」いざこちのよさ

1988 年から 22 年間、近畿地方を中心に展示会を開き、野の花工房の活動を伝え草木染の魅力を広めてきました。

展示会に来られた各地のお客様に野の花工房の商品を実際に見て触れて頂くことで、草木染の色の美しさ、素材やデザインにこだわった丁寧なものづくりを伝えてきました。また、一人ひとりとゆっくりお話しをして、商品が生まれるまでの背景や過程を伝えています。

そのような積み重ねが、野の花工房の展示会のリピーター率（約 70%）の高さにつながっています。





(4)「コミュニケーション力」

(非公開)

(5)「ネットワーク力」

①染料となる植物採集での地域との関わり&生徒さんのネットワーク

染料となる植物の多くは近隣地域から調達しています。そのための地域ネットワークはとても大切です。

ネットワークを使って旬の植物がどこで手に入るかや、廃棄される植物の情報を得て採集に行き、有効活用し



ています。又生徒さんの協力も欠かせません。野の花工房の少ない人数では無理なことでも、近畿地方の各地から集まっている生徒さんのネットワーク力を発揮してもらい、植物採集に大いに役立っています。

②染める為の素材(布、服、ストール等)の調達

(非公開)





Ⅸ. 知恵のふくろう成長の物語 ～今後の展開&事業継承

(非公開)





X. あとがき

1. 知恵の経営とは

知恵（知的資産）とは、従来財務諸表に記載されている資産以外の無形の資産であり、企業における競争力の源泉である人材、技術、技能、知的財産（特許・ブランドなど）、組織力、経営理念、顧客とのネットワークなど、財務諸表には表れてこない、目に見えにくい経営資源の総称を意味します。したがって、「知恵の経営報告書」（知的資産経営報告書）とは、目に見えにくい経営資源、即ち非財務情報を、債権者、株主、顧客、従業員といった利害関係者に対し、「知恵」を活用した企業価値向上に向けた活動（価値創造戦略）として目に見える形でわかりやすく伝え、企業の将来性に関する認識の共有化を図ることを目的に作成する書類です。

経済産業省から平成17年10月に「知的資産経営の開示ガイドライン」が公表され、平成20年5月には京都府が「京都府知恵の経営報告書—作成ガイドブック—」を公表しており、本報告書は原則としてこれらに準拠して作成しています。

2. 本書ご利用上の注意

この「知恵の経営報告書」に記載しました将来の経営戦略及び事業計画並びに付帯する事業見込みなどは、全て現在入手可能な情報をもとに、当工房の判断にて記載しています。

そのため、将来にわたり当工房を取り巻く経営環境（内部環境及び外部環境）の変化によって、これらの記載内容などを変更すべき必要が生じることもあり、その際には、本報告書の内容が将来実施又は実現する内容と異なる可能性があります。よって、本報告書に記載した内容や数値などを、当社が将来にわたって保障するものではないことを、十分にご了承願います。

3. この報告書についてのお問い合わせ先

四季の草木染 野の花工房

主宰 松本つぎ代

〒610-0302 京都府綴喜郡井手町井手宮ノ本73-5

電話0774-29-3337 FAX0774-29-3337

* 作成支援

専門家 中小企業診断士／中川普巳重

井手町商工会 経営支援員／野崎幹夫、太地康之
〒610-0302 京都府綴喜郡井手町橋ノ本14-3

山城地域ビジネスサポートセンター 経営支援員／篠永卓士
〒610-0334 京都府京田辺市田辺中央4-3-3

